

# わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連  
216  
載

## 人生の先の先

菅義偉首相が首相候補

として名前が挙がった時、菅氏が集団就職で秋田から上京したというニュースが流れた。菅氏の、実直で苦勞人というイメージを強調したかったのだろうが、実際は少々状況が違ったらしく、以後その話題は出なくなった。

菅氏の年齢から考えると、その頃の大学進学率は20%ほど。2018年の大学進学率は53%であるから、大学に行くことがまだ珍しかった時代だろう。では今、中学を卒業し、すぐに就職する人は？とふと思いついてみたところ、平成30年は0.2%で、98%は高校進学

道を進んでいる。私が中学を卒業する時代は、高校に進学しない子はクラスに1〜2人だったと記憶している。今やすでに高校が義務教育化しつつあるのだろう。

この手の話題に触れるたびに、いつも私の脳裏に蘇ってくる男の子がいる。その子は中学の同級生だったのだが、他の子に比べて、うんと体が小さかった。いつも肘のあたりがテカテカ光る、いかにも誰かのお下がりの詰襟を着ていて、年中同じ格好だった。きょうだいが多く、確かその子は末っ子だったと聞いていた。

中学卒業が近くなると、

その子は休みがちになった。家が自営業でその手伝いをするのだということとだったが、本当かどうかはわからない。高校には進学しなかった。きつと、そのまま家の仕事を手伝うのだろうと思うと、子どもごころに大変だな

かしたら、学校に来ることとはその子にとっては息抜きだったのかもしれない。家の仕事の内容は知らないが、私にとって働くということはまだ遠い世界の、大人の営みという感覚だったから、少々の時間現実を離れてクラ



あ、という気持ちを抱いたことを覚えている。忘れられないのは、その子の笑顔だ。とにかくいつもニコニコしていた。丸い顔に坊主頭で、すばしっこく教室中を動く様は今でもはつきりと思いつ出すことができる。もし

「としごろ」という映画があった。改めてその映画を観て驚いたのは、森昌子（演じる主人公）は中学を卒業してすぐに工場で働くのである。まだ高校進学が当たり前の時代ではなかったことを思い、たちまちくだんの男

スメートとはしやいだり勉強したりすることがきつと楽しかったのだろう。イジメという言葉もなかった頃である。

私の時代、花の中3トリオといえは、森昌子、山口百恵、桜田淳子だが、当時、森昌子出演の

の子の顔が浮かんだものだ。還暦を過ぎ、より昔を懐かしく思い出す年齢になった。

チラホラと同級生の死や病に臥せているという風の便りも耳にするようになった。学生時代に、華やかでスター的存在だった男子がみずから命を絶つたと聞いた時は心底驚いたし、美人でスタイルが良く、大学のコンテストでミス〇〇となった子が、その2年後に車の事故で亡くなったと知り、運命の残酷さに絶句した。

あの、男の子はどうしているのだろう。ほとんどの子が高校進学する中、彼はどんな思いで同級生と過ごし、何を思って家業に就いたのか。

今となつては想像するばかりだが、きつと幸せな人生を歩んでいるに違いない、心からそう信じている。

イラスト・伊藤香澄